の程度まで知っているか、きわめてよく理解しているという立場から出発していた。けっきょく、その論調は大部分、その主張に対する非常に浅薄で極度に非科学的な論証であったため、わたしにまたしても疑いを生ぜしめるようなものであった。

わたしはそこで、幾週間も、実際幾月も、またもとのところへ逆もどりした。

問題は非常に大きく、非難は極端であるように思えた。わたしは誤りをおかすのではないかという恐れに苦しめられ、ふたたび不安で、自信がなくなった。

もちろんここでは、ある特定の宗派に属するドイツ人を問題としているのではなく、ある民族自体を取扱っているのだということを、わたしも疑うことはできなかった。というのは、わたしがこの問題に没頭しはじめて、ユダヤ人にはじめて注意するようになって以来、ヴィーンについて以前と違った印象を受けたからである。いつもわたしが行くところで実際にユダヤ人を見た。そしてわたしが見れば見るほど、かれらが他の人間と違っているのが、ますますはっきりと見えてきたのである。特に市の中央部とドーナウ運河の北部の区域は、外見的にもドイツ民族と似かよっていない民族が密集していた。

だがわたしがまだ疑っていたとしても、けっきょくは一部のユダヤ人の態度によって、そのあいまいな点が除かれた。

ヴィーンではかなり広範囲にかれらの間で大きな運動が行なわれていたが、これこそユダヤ人の民族性をこの上もなくはっきりと証明するものであった。すなわちシオン主義がそれである。

もちろんこの立場は、あたかも一部のユダヤ人だけが賛成しているが、大多数はそういう取りきめに反対し、心から拒否しているかのように見えた。しかしこの外見をもっと詳細に眺めると、純粋の

ご都合主義の根拠から発した嘘といわぬまでも逃口上という不快な霧の中に飛び散ってしまった。というのはいわゆる自由主義的な考え方のユダヤ人たちが実際シオン主義者たちを拒否するのは、かれらがユダヤ人でないからではなく、ユダヤ人として公然とユダヤ教に対する信仰告白をすることは非現実的であり、しかも危険であるかも知れないからであった。

かれらが内心でいっしょに組んでいることには、まったく変わりなかった。

シオン主義ユダヤ人と自由主義ユダヤ人の間のこの見せかけの闘争は、それでなくてもまもなくわれわれに吐き気をもよおさせた。それは徹頭徹尾真実でなく、もちろん嘘であり、さらにいつも主張されるこの民族の道徳的な高尚さと純粋さに適合しないものであった。

一般に、この民族の道徳上の、あるいはその他の清潔さというもの自体が問題点であった。水好きでないことが問題であることは、人々が外見を見ただけで、遺憾ながら往々にして、しかも目を閉じていてもわかる。その後わたしは幾度もカフタンをまとっているものの臭気で、気持ちが悪くなった。その上なお、きたない衣服をつけているし、外貌も雄々しくない。

すでにこうしたものだけでも、はなはだ人をひきつけるところがない。肉体的な不潔以上にはからずも、この選ばれた民族の道徳的汚点を発見したときは、嫌悪の情をいだかずにはおれなかった。

まもなくある領域でのユダヤ人の活動のやり方に対する洞察が徐々に深くなってきたとき、これほど考えさせられる気持ちになったものはなかった。

どんな形式のものであれ、まず第一に文化生活の形式において不正なことや、破廉恥なことが行なわれたならば、少なくともそれにユダヤ人が関係していないことがあったであろうか？

こういうはれものを注意深く切開するやいなや、人々は腐っていく死体の中のウジのように、突如

さしこんだ光によってまぶしく目の見えないユダヤ人を、しばしば発見したのである。

新聞、芸術、文学、演劇における活動をわたしが知ったとき、わたしの目に映ったのは、ユダヤ人がもっている重荷であった。かざりたてられたすべての格言も、ほとんど無用であるか、まったく無意味である。広告塔の一つを見て、そこでほめそやされている映画や演劇のぞっとする駄作の精神的創作者の名前をしらべ、しばらく動かずにいるだけで十分である。それは民衆が感染したかつての黒死病よりももっと悪質のペストであり、精神的なペストだ。しかもこの害毒がいかに多くつくられ、ばらまかれたことか！　もちろんこうした芸術製造業者の精神的、道徳的水準が低ければ低いほど、それだけ無限にかれらを実らせるのであり、ヤツは遠心機以上にかれの汚物を他人の顔にふりまくのだ。その場合、かれらの数が無限であることを考えてほしい。自然が一人のゲーテに対し、いつもなお何万という当代のヘボ小説家でなやませ、最も悪質のバチルス保菌者として魂を毒するのだ、ということを考えてほしい。

恐ろしいことだ。だがユダヤ人こそこの不名誉きわまる使命に、自然によって大量に選びだされたように見えることを見すごしてはならない。

かれらが選ばれたものだという理由を、そこに見いだすべきではないだろうか？

当時わたしは公の芸術生活のこの不潔な作品の創作者の名前を全部、注意深く調べはじめた。結果は、ユダヤ人に対してわたしがいままでとっていた態度にとって、いっそう悪いものであった。そこではなお感情が千倍も反対しても、理由がその結論を引きださねばならなかった。

すべての文学的な汚物、芸術上のキワ物、演劇上のバカ騒ぎの九割が、国内の全人口の百分の一にも達していない民族の債務勘定に帰するという事実は、簡単に否定されなかった。事実そのとおりだ

った。

またわたしはそこで、わが愛する「世界的新聞」を、このような観点から調べはじめた。

ここでも測深機を深く入れれば入れるほど、ますますわたしのかつての驚きの対象が小さくなった。文体はいよいよ耐えがたいものになる。わたしは内容を、内心浅薄で平板なものとして拒否せねばならなかった。叙述の客観性が、いまやわたしには、りっぱな真理としてよりもむしろ嘘に見えた。ところが編集者は――ユダヤ人だった。

以前にはほとんど見なかった幾千のことが、いまや注目に値するものとしてめだってきた。そのほかにかつていままでにわたしに考えさせる誘因を与えたものを、もう一度理解し、判断することを学んだ。

この新聞の自由主義的な志向を、いまや違った光の中で見た。攻撃に対する回答の上品な調子もその黙殺もわたしにはいまや、怜悧な卑劣なトリックと見えてきた。その輝かしく書かれた劇評は、いつもユダヤ人作家に関しており、そしてかれらの不評はドイツ人以外のものには向けられなかった。かたくなにもヴィルヘルム二世を軽くあてこすることもなく、フランスの文化や文明を賞賛するのと同様に手段だとわかってきた。小説のキワ物的内容はいまやわいせつなものとなり、わたしはそのことばに異民族の声を聞いた。ところで全体の意味は明らかにユダヤ人に有害であった。これは意図されていたのだ。

しかしだれがそこに関心をもっただろうか？

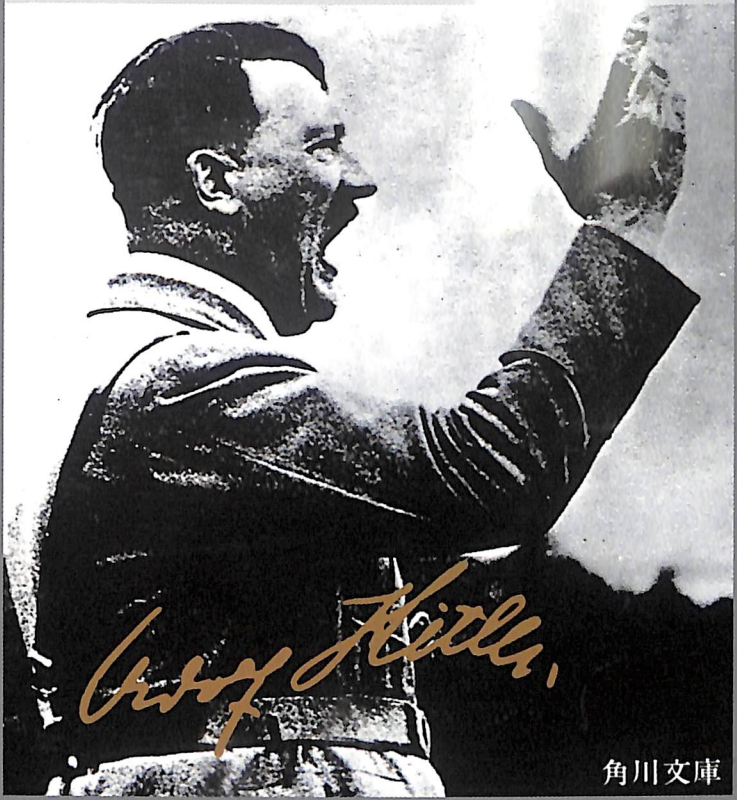
これらのすべては単に偶然だったのか？

そこでわたしは次第に不安になった。

わが闘争 上

I 民族主義的世界観

アドルフ・ヒトラー　平野一郎　将積茂 訳



角川文庫